

うちに痛みも和らぎ、それぞれ家に帰るべく解散する事に成りました。

兵器廠を出て被服廠に向かうと、家屋は半壊、瓦礫（がれき）状態で、人々は右往左往、瓦礫の下からの「助けて！」の悲鳴を聞きながら、専売公社を通り御幸橋にかかると、人々の服装が一変していました。川風に当たると少しはいえるのか、モンペが焼け剥がれて、顔と歯が一緒の様に青ざめたパンツ一つの女学生、裂かれた皮膚が爪の所でぶら下がって幽霊の様な人、上半身が火脹れで、目は糸のように、口は蛸の様な人、みんな橋の端で蹲（うずくま）っていました。御幸橋を渡り駐在所前に来ると（私は東から西に来た）西から来る人、北から来る人のもも無残な姿を見て、爆発の中心は鷹野橋から城や西練工場のある五師団

の方向と感じて左に行く。寄宿舎の方に足をすすめました。二階建の校舎は一階になって傾き、サッカーグラウンドの向こうにある寄宿舎のブロック塀は北向きに倒れ、屋根は無く、自分の部屋に行くと、大掃除の時の様に畳は左右に立ち、空が見えていました。しかし戸棚、本箱、行李は無事でした。

西日が差す頃、私の名を呼ぶので振り向くと、上半身火脹れ、目は糸の様に細く、口は蛸の様な少少年で誰か分からない。聞くと、因島での小学校の同級生で、彼「やられました。広島人は百メートル通りの強制疎開で壊した家屋の整理に動員されて、作業を始めた時、ピカッと光った次に、暗闇（やみ）となり、アツと思った次に隣の女学生の黒髪がポツと燃えました」と。自分

の燃えたのと言わない。彼の上半身で残っているのは、背中のだらみに、ランニングシャツらしき白く焦げた小さい布が焼き張り付いているだけでしたのに。彼はそれから火事の中、宇品港まで逃げて、因島への方法を待っていたが。彼の様な怪我（けが）人は、当時外地から引き上げる軍隊の検疫所があった似島に強制的に送られそうになったので、送られると助からないと、恐くなって逃げて帰ったとのこと。

彼は二日前因島に帰郷して、列車の遅れで当日は直接に作業場に行つたので、私の母から預かったアラレを要れた茶筒を、自分も火脹れになった惨事の中を持ち帰り、お母さんからの預かり物ですと差し出され、彼の誠意に、言葉ありませんでした。明日一緒に因島に帰ろうと、彼の